

町田市立図書館メールマガジン（2026年7月15日号）

みなさまこんにちは、町田市立図書館です。
メールマガジンを配信します。

図書館職員おすすめ本

『銀の海 金の大地』（シリーズ）
B913. 6-ヒ／氷室冴子／集英社／2025年

コバルト文庫は創刊50周年（1976年創刊）を迎えた、ティーンズ女子向けで一世を風靡した、集英社の文庫レーベルです。あの時代の本好きの少女は、ここを避けて通れませんでした。令和の時代になって、展示会開催や、あの未完で有名な『まんが家マリナ』シリーズが復刊、完結予定だという驚きのニュースがでてうれしいやら、困惑するやらの今日この頃。

今回ご紹介するのは、そのコバルト文庫全盛期に発行された、氷室冴子先生の『銀の海 金の大地』（集英社 オレンジ文庫にて再刊）です。

「古代転生ファンタジー」との冠がありますが、なんと舞台は弥生時代。大和王朝時代。淡海（滋賀）に住む14歳の少女・真秀には、二人の大切な家族がいます。目も耳も不自由な兄の真澄、いつまでも言動が幼児のままの母御影。3人で必死に暮らしていると、真秀の美しさに気が付いた若首長が手を出してきて……!? これからどうなるの!?

……のようなドキドキ恋愛の展開! と思われたのですが、真秀たちの出生の秘密、特殊な能力を持つ一族が明らかになり、国を興す戦いに巻き込まれ始めます。そして熱い超能力バトルへ……。神秘的な雰囲気はずっとあったけど、まさか超能力バトルになるとは。最初に真秀に迫ってきた若首長なんて、再登場してきた時「おめー生きとったんか、よかったな」と思うぐらいにハードな展開になります。

『なんて素敵にジャパネスク』で平安時代を書いてきた氷室先生による、古代日本の描写は、弥生時代を覗いた気になるほど巧みです。ただ、この物語は作者急逝により、全11巻、第1部完で止まっています。この後の展開はいったいどうなるのか……。実は、想像できる余地があります。

なぜかという、この『銀の海 金の大地』は『古事記』の一節「佐保彦王の反乱」がモチーフになっているからです。つまり、あの人はこうなる予定だったのか? 本当に?? ……みんな、古事記も読もう。

私が好きな登場人物を3人挙げます。1人目は「美智主」。政治や交渉力で世の中を渡っていく、腹に一物ある40代の男性です。主人公をめぐる超能力大戦の中でも全く特殊能力も持たない、普通の人。ですが、とにかくあきらめない。中年の星です。

2人目は、物語のヒーロー「佐保彦」。最終的には主役になるはずだった続編がなくなったせいで、ただ運命に弄ばれる大変な子になってしまいました。この物語が作者の手で完結していたらどうなっていたか、一番気になる存在です。

3人目は「伊久米の大王」。一番偉いはずなのにずっと周りに気を使っています。それが他人に気を使わない人が多めの銀金世界のため、とても目立ちます。いい人なのになあ。正統派ヒロイックファンタジー。でも未完。ただ、この後の展開をいろいろと推測できる。そんな夢見果てぬ大作。読む価値ありますよ。

（PN. 昭和の激重コバルト乙女）

『やさしくわかる! 文系のための東大の先生が教える宇宙の終わり』
443. 9／横山順一（監修）／ニュートンプレス／2023年

人生に疲れた時、ふと宇宙のことを考えます。今でも宇宙はすごい速さで膨張し、どんどん広がっていついていか。私たちの住む天の川銀河も、いつかは隣のアンドロメダ銀河とぶつかって、ひとつになってしまうそうです。考えていると自分の悩んでいることなんて、たいしたことがないのかも、と思えました。

では、永遠に広がっていく宇宙に、果てはあるのでしょうか? このまま、ずっと大きくなっていくのでしょうか。この世の中に、無限なものはあるのでしょうか。

このシリーズは、そんな疑問を“理系の知識がなくてもわかる”ように、専門用語をやさしい言葉で言い換えながら、なんと東大の先生が!（肩書に弱い）問答形式で教えてくれます。

今回は「宇宙の終わり」について先生が教えてくれます。地球も滅び、太陽も燃え尽きた宇宙の行き先、理系の頂点の方々はどう推測しているのか? 文系の方にも気になりますよね! 別のシリーズになりますが、計算なしで概念を教えてくれる『文系のためのめっちゃやさしい微分積分』もおすすめです。ブンケイビブンセキブンワカラナイヨネ。

（PN. ヘリオポーズ）

『木島櫻谷 画三昧への道』

721.9-コ／木島櫻谷（画）／東京美術／2022年

この本を棚で見つけたら、まずその背に注目してほしい。小鹿が微笑んでいる。
本文によると、この『鹿の母子』という作品は、夏目漱石に「笑っているようで気持ち悪い」と評されたそう。気持ち悪いかどうかは個人の感覚によるとして、この小鹿はやはりにっこりと笑みを浮かべているように見える。

木島櫻谷（このしま・おうこく）は、明治から昭和にかけて活躍した日本画家で、生涯写生に力を注いだという。日々携えていたという写生帖は現存しているものでおよそ600冊、その中には動物を描いたものも多い。飼い犬や飼い猫などの身近な生き物から、野山の野生生物、動物園のライオンまで、様々な動物の様々な姿が残されている。この小鹿の微笑んでいるような表情も、自然の中の一瞬一瞬を逃さず見つめ、紙の上に写し取ってきた櫻谷だからこそ描けたものなのだろうか。

これを書いている私が櫻谷の魅力に引き込まれたきっかけも、鹿を題材にした作品だ。『若葉の山』という初夏の風景の屏風で、鹿の子模様の鹿の群れが描かれている。中央に描かれた小鹿はなんともあどけなく、愛らしい。左側に描かれた鹿たちは目を細め、初夏の心地よい日差しの中でまどろんでいるようにも見え、思わず触れてみたくなるような鹿の毛の質感に対し、山に生える木の幹はごつごつと力強く、生命力を感じる。

櫻谷の魅力は動物画だけではない。雄大な自然、小さな花、人々の営み……、どれも繊細な筆致と美しい色彩で描かれている。この本では、櫻谷の作品を動物、花木、人物、山水の4章に分けて紹介している。お気に入りの画を見つけたら、実物を見に展覧会へ足を運んでみるのもいいかもしれない。

（PN. 鹿の虜）

=====

町田市立図書館

ホームページ：<https://www.library-machida.tokyo.jp/>

X：https://x.com/machida_library

◆メールマガジンのバックナンバーは、町田市立図書館ホームページからご覧いただけます。

◆メールマガジンの配信停止、メールアドレスの変更等は、町田市立図書館のホームページからお手続きください。

=====

2026年7月15日発行